

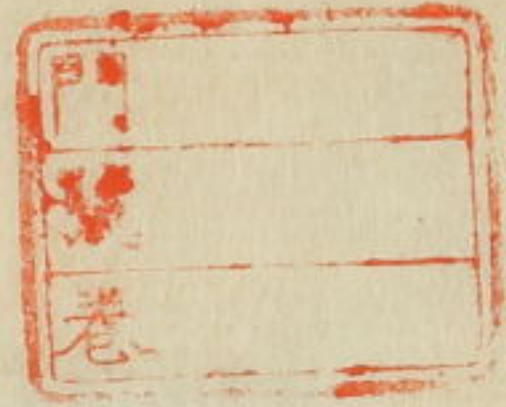


陶犬新書

下

5卷1
431
止





陶大新書卷之三

目錄

- 刀 祢 ○白紙の謨 ○菖蒲の前
- 金液の墨跡 ○葉土宮室の塗りに灰紙用
- 大原色 ○毒坂の巻に換ゆ紙 ○瓢箪の水けし
- 團子の志呼 ○清朝諱紙の例
- 紙の尊きもの ○殿とらふ文字 ○伽羅の傍
- 小児の文字 ○之結 ○端午 ○五夜
- 五九月 ○饅頭 ○平家蟹やとを具

○板中拾玉集 ○竹枝會子たけえ ○秋袋の歌
 ○壁の上塗かべのぬり ○謡の詩 ○亀の雄雌 ○取贖
 ○大欵おほいけの歌 ○辻つじ ○桐角 ○風箏
 ○温胸ぬくむね ○米言 ○齒はくらえ ○孔子の教
 ○いちや ○信巫 ○朔望 ○天明あけぼの ○名利
 ○つゝつままけ ○瘡病 ○酒令 ○黄昏 ○茶利
 ○雲鼓 ○十二生肖 ○承塵 ○貨財の別
 ○奥肉の所おくにくのしよすすことことよよととす ○うう家か具ぐ

陶犬新著卷之三

浪速 中洲漁叟後撰

刀祢

俗著に。刀祢はなより文字紙殿より文字に
 宛あて。かれかれええどどののとと詔みことすすよよるるととわわかかすす。刀
 祢はなより。村里むらより。考かややよりよるるあり。かからら秋
 人ひと。神崎かみのの刀祢はな野のりりあり。刀祢はなよりよるる神
 崎かみ川のの交ま舞まするる人ひとあり。其その娘むすめのの思おもいいあり
 あり。古今集の白しろ草くさよりよるるかか如ごとく。其その證しるしは

菅谷の長谷寺縁起の文に。天智天皇即位
 七年戊辰歲。拓城上郡。長谷卿。於神
 河浦。挽捨去。其後留于於里。廿九年。犯
 彼木者。不平云。德道聖人。聞於言。強
 知可有靈奇。則里人請曰。我夢三寶
 德者。以於木。將奉造。十一面觀自在菩薩
 像。云々。於是吉光刀祢等。悅貴
 許。伴木と有。是則長谷川の刀祢あり。
 又長谷我部ノ大觀百箇條に。他至江

上下共お入し奉。在行人手老中判形無
 者。浦々山々一切不可通。山々者其形
 在屋。浦々ハ刀祢。定置上ハ若後中村。櫻
 お入者。即時右々者可成敗。事記極船系
 此者。其船頭と元可_レ行罪科_二奉。これハ浦
 川の支配頭ある事云々。一。后より文字
 に表るいむる也。

白紙の謨

紫人者流々をりてやす白紙の謨に。山崎

閑齋が詩紙。法一。又大徳寺の江月法庵
の詩も有と之と云。抄出たきものに何とす。
浪華の女子のうらふ小唄に。法一と見え奉れ
お葛籠馬よ。ふとん張し。小姓衣故事。
うねと登まね。いやは今下る。こゝれ根の山
みちまね。父いやまこ。一。双墨持さず。まね
白紙のあつとよむ。とりよこ。似と紙白紙の
後存。葉夢得が巖下放言に。士人郭
暉因寄事。問語封一白紙去。細君得

之乃寄一絶云。碧紗窓下啓。楮封一尺紙。
從頭徹尾空。意是仙郎憶。引恨憶
人全在不言中。一。と深情お似と執るゆ。
こに記す。又閑齋白紙讀。善赤黒黄
無一點。顔善呉畫。是守常。這中
引有。深情在。閑。里言詩得。卜商。

菅 薄の前

太平記十一巻に。真都と覺一檢校と二人
法れ。平家紙とひるに。近衛院の時時。

紫宸殿の上に。鷓鴣よの怪鳥飛来はて。夜子
 少れ鳴りて。源三位執政勅紙奉て。射し落
 たるれば。上皇御もあく。歡感ありて。紅の御
 衣は南庭に肩にかけらる。坊勅賞に官位を。
 御國を。形勢多に足らず。誠やらん執政の。後
 壺。昔蒲に心城ふり。堪ぬ思いに沈むる。
 と宵の勸賞に。坊昔蒲下はる。但し
 坊昔執政。青にの。聞けいま。目に足らん
 ちんば。口々。や。わ。ち。女。房。紙。あ。ま。こ。か。り。引。焼

ち。何や。あ。ま。を。あ。ぬ。忠。紙。す。ま。の。紙。と。知。ん。が。ら。か。や
 作られ。後宮三千人の侍中めうちよめ。花紙
 精。月紙。姑。お。程。の。女。房。達。紙。十二人。同様。に
 紫。束。せ。付。せ。し。中。の。ほ。の。れ。紙。氣。色。を。あ。く。金
 紙。め。う。ち。ま。の。中。に。り。ま。き。り。紙。す。て。執。政。紙
 清。涼。殿。の。孫。廂。く。り。ま。れ。更。衣。紙。教。使。え。今。夜
 の。抽。賞。あ。ら。浴。香。の。泥。の。昔。蒲。紙。下。は。る。し。
 其。手。の。た。ゆ。く。と。ま。み。び。く。ら。引。け。我。宿。の。あ
 と。あ。せ。と。が。り。作。下。され。り。紙。執。政。教。に。使。ひ。て。

清涼殿の大庭に手折るひや候ひるが。
づれも齡よ二八七色を執り申す。みえくも
繪に著しき。筆を及ひてこそ程なきが
金華の粧ひは餘り。桃麩の媚ひは念うて。華
形もば執政への陳述の目もはらひて。づれ
故草薙浦と引べき心地もあつるを。更なるを
て水まあらぬ。御香の沼にまぎるるをこそ
何れと申ししれは。執政

五月雨に流るる水も水廻り

つれづれや見を引るひは。とらふみと
ル執。時に近清殿の庭。餘りの感に堪ふと
自らまて草薙浦の前へ神代引。これこそ
宿の毒も。執政にこり下されル執。と有
どえ。平家初孫の秘の役も。主上御人の
あ、玉と申す御下は執。うづの左大臣及
紙給は流す。執政に終ると申す。折所
り。紙。あまを。折所。こら
卯月十日の事。お井に

なり。あれと云ふ申入やどく玉を乞ひし。叶沙
石集の作者無任。権系系時の御有り。然
るに系時の三男三郎衛尉系成の事記が
けまひつかに著され。昔甘浦のつらねの歌
のつらね。権系系成の事。固より太平
記の一卷目うさびのつらね。参考太平記
なり。按ずれば所直和歌は去るはるまゝに何
れ。其作らるるの歌多く権系に載す。去るに
文にりとも。野人村まに何れ。あつた實に

うさびのつらね。又新古今集の那波流戒のうさ
びらぬたにりふ初五又度成。はるまゝに
と也。是も中。おきと申。又一松軒は筆下
如性博一。其弟子博賢也。其弟子明石自
一。高成是守所直。徳成徳也。徳成の
了。起るとりふ。去るに太平記の育るの名成貞
寛一と云ふ二人とす。又参考太平記。西河院
印の寛一に作はれ見たりとす。又檢撰徳成引
り。寛一。氏ハ明成。名心月とす。徳成の文字也。太

平記の鶴の文字とす。あにのやとるの二枚紙の
野村高房とす。梅月堂宣阿の門人ト云。三玉
桃華抄の作者とす。盲人一人とす。よるる所
ありやとす。又参考太平記に二人とすとの意
九中、城集巻七に参考せしむ。そのうちの今川
家本、北條家本、西源院本、南都印、切引、の
ミキ。五月雨と浪の岩垣うのをいへと有。又毛利
家本、川浪のまことのみとれ合ひてと有。そのれ
は、このまこととすれ。のあし作者の傍記を
る

る。城集巻七に参考せしむ。そのうちの今川
家本、川浪のまことのみとれ合ひてと有。そのれ
は、このまこととすれ。のあし作者の傍記を
る。あやむのる
あやむのる。城集のる。起るる。あやむのる
あやむのる。城集のる。あやむ。城集のる。事、實、の、あ
べり。と、あやむ。と、杜撰の、事、實、を、急、し、。今、川、心、性、の
理、あ、や、む。に、太、平、記、一、二、卷、ハ、素、笑、法、印、と、素、意
會、後、し、て、あ、や、む。三、四、五、の、卷、ハ、蘇、島、と、素、意、と
會、し、て、あ、や、む。七、八、ハ、赤、松、則、祐、入、道、と、素、意、と、會
談、し、て、あ、や、む。十、一、十、二、ハ、若、智、院、と、あ、や、む。十、二、ハ
素、意、と、あ、や、む。十、三、十、四、ハ、南、將、兵、衛、と、あ、や、む。十、五、ハ

後三即高徳勅より成りて書す。二十七十八廿三
の巻ハ古急書す。と有り。廿一巻の作者ハ
古書アリ。廿二廿三の巻ハ録書有る。廿四廿五の巻
ハ別列せし有り。太平記ハ漢字振替アリ書
されども。何れも又細くあり。書紙書のこと
みバ。書れきりに書す。とりあふこと。申有る
金御しの墨跡

子何れ有。急書有る。書す。教とこと。有る
山金御しの墨跡。正扶采頌要修行。

日用應須痛着難。會得今中端的意。
從教日午打三更。と有。落教のとり
佛照といふ二字故。書す。これハ何れ有。
急書をけ付し。今中書紙。辨高し。と有。予
これ故とす。世上の急書に。騰寫するもの
多し。又は小異。一ハ。得る。と有。かく。急書
白石先生の急書。急書。痛の文字故。石と
書し。會教今と。今故今と。端故騎と
し。從故假と。今故手と。又佛學

下に老僧古より三字城者乎。り是も得
字ありや。記し人繼正城者也。

漢土宮室城のみに灰土用申

主のら宮室の移包に。胡粉城不用し人。
牛羊の骨城灰とて用申すなり。城下放
言に。余守許昌時。洛中方營西内。甚急。
宋昂以押轉運使主之。其屬有季寔。
韓溶二人。最用事宮室梁柱。闌檻。總
踊。皆用灰布。朔既迫。竭洛陽内外。

猪羊牛骨。不克用。韓溶建議。掘滿澤
人骨。以代。果攸然。從之。とら議。惡穢不
為。破言人にまのれ

大原色

大原色。のほき。東山屋。孝阿とら。日嗣の
好。拵。底。三寸。六歩。六層。深。六寸。外。の。為。井
六了。六層。香。屋。蔭。繪。大原。色。の。ま。や。玉。木
之。把。に。は。う。の。枝。城。一。把。の。方。の。り。又。馬。子。三
中。ち。し。有。中。款。ハ。小。系。木。や。是。也。と。ま。し。木

しつゝ切也。こゝろをうすくも。まじしつゝ也。
けり所製と云。又倭馬集のうゝと云り。

毒奴夢に換ゆり

叔車に馬と毒とがゆると云ふ。あれは云。毒と毒と
かゆり又おもひつゝ。貴中。明詩宗に。華
亭朱吉士大韻嘉靖丁未進士。情好藏
羞尤。愛。宋時。續叙。訪得吳門舊性
存。宋。繫。寇。後。漢。記。係。陸。放。翁。劉。復
溪。謝。墨。山。三。君。之。評。飾。以。古。錦。玉。戴

遂以一次婢易之。蓋此狀不能也。婢臨行
時。題詩於壁。吉士見詩。惋情。未幾。捐
館。中。年。李。高。士。延。是。之。云。と。い。ふ。の。詩。
手。端。割。愛。出。深。閨。猶。傍。前。人。換。馬
時。他。日。お。逢。莫。惆。悵。暮。風。吹。書。送
傍。枝。

瓶 覃之水

琴白集に。いつより何や。と云ふ。あつた
ちりひは。いよの番。持佛の具に。得。と云。おの

から。葉の湯の水は〜にま〜と〜ふ〜は
こ〜む〜。水は〜に作〜の月ひ〜。也。
年〜及〜を〜る〜り。

葉子團呼

八月五日。月に葉の粉を團子製し
葉〜と〜其〜と〜有。隨團隨筆に。三餘帖
云。葉妻婦。娥奔月。葉思之。以米粉
作團呼。而祭之。婦嫁遂歸。と有。此
葉子。呼の字故考く〜る。

清朝諱の避る凡例

何文煥が歷代詩話の凡例に。書中敬避字
遵例。改寫聖祖仁皇帝廟諱。上一字
作九。下一字作燬。世宗憲皇帝廟諱。上
一字作允。下一字作正。皇上御名上一字
作宍。下一字作歴。と〜九〜と〜宍〜の
暉る。允の歴る。正の禎る。宍の弘る。
歴の曆る。坎の并ぬ。乾隆庚寅の嘉
嘉慶帝の永琰と〜の諱也。い〜考換

るやきくず。村傳曰。傳きくもなり。

絆ハ尊きもの

有紐き。御代にうまれあうら。心著る海と
世代海と。むしころなき絆まらば
つらたろるれど。吾が身代かてまらぬきもの有。
むしころ絆文絆。まらばむしころ。いん
とまらば。そよめむし。諸包の價やまら
ずや。諸包の安き。諸包の多き。安。價の
安き。い合銀の虧通まら。安きゆ。なり。

まられぬ。むしころ。絆ハ子。子の
むしころ。絆文のむしころ。幸文類集續集。
晋の魯褒の絆神諦。絆文。絆の文中。
子夏曰。死生有命。富貴在天。告以死生
無命。富貴在絆。何以明之。絆能轉禍
為福。因敗為成。危者得安。死者得生。
性命長短。相祿貴賤。皆在乎絆。
天何與焉。とりよるに絆有。
御代何たり。物を奪り。心。能。

祿_二がよの申_一の不自由_レれるるに_一。末世_ニとま_レめ
 申_レくもおき_レひ_レ居_レる_一ことあり。これ_ハう_レ海_ノの_レむ_レこと
 と_レり_一。それ_ハ金銀_ノの_レ諸_ノを_レと_レ違_レひ_レ城_ノを_レせず。
 申_レくま_レく_レあり_レ申_レくを_レの_レあり。東_ノの_レ金_ノの_レ西_ノ家_ニ
 移_レる。ま_レく_レの_レ細_ノの_レ家_ノの_レもの_レあり。これ_ハ
 藤_ノ末_ニに_レま_レれ_レば。おの_レの_レさ_レら_レの_レあり。これ_ハ
 古_ノ教_ノす_レる_レを_レの_レ。福_者と_レなる_レ教_ノ。あ_レん_レが_レ時_ノま_レ
 河_ノと_レい_レふ_レん_レや。おの_レの_レ身_ノ代_ノの_レ昔_ノ無_レい_レえ
 と_レ。時_ノま_レの_レ昔_ノ無_レい_レえ_ノの_レあり_レる_レあり。

既に昇_レ年_ノの_レた_レえ_レに_レり_レ。延_年の_レ御_代と_レい_レ
 かく_レ御_代

御_代の_レこと_レま_レの_レに_レり_レず。其_レ延_年十_一年_ニ
 参_レ議_レ清_行朝_ノの_レ意_見立_レ簡_係と_レい_レ
 奏_レ事_{あり}。これ_ハ延_年申_レに_レる_レこと_{あり}。
 一_レに_レか_レる_レこと_{あり}。試_レ立_レる_レ。その_レ文_ノに_レて_レ。
 天_智天_皇為_レ皇_{太子}攝_政。從_レ行_路宿_二
 下_道郡_一。見_レ一_レ御_代。是_レ甚_盛。天_皇下_レ
 詔_試。被_レ封_レ。御_代。軍_士。即_レ得_レ勝_兵

二萬人。天皇大悅。名之曰二萬鄉。後改曰通磨。其後天皇崩於筑紫行宮。終不遣此軍。然則二萬兵士彌可蕃息。而天平神護年中。在大片吉備朝臣。以大臣兼本郡大領。試計此鄉戶口。纔有課丁千九百餘人。貞觀初。故民部卿藤原保則朝臣。為彼國外時。見舊誌。此鄉二萬兵

士之文。討大帳之次。閱其課丁有七十餘人。某到任。又閱此鄉戶口。有老丁二人。正丁四人。中男三人。去延喜十一年。彼國外。藤原公利任油歸部。清行。問通磨鄉戶口。當今幾行。公利答。每有二人。謹計。年紀。自皇極。天皇六年。庚申。至延喜十一年。辛未。纔二百五十年。衰弊之速。亦既如

此。以^テ一御^ヲ而推^レ之天下。虚耗指^テ掌^ヲ可^レ知。としよ考^テ。素弊^ノ城知^ル。し。

殿としよ又字

去んぶるとしよ又字。殿の字城用^申。武
者物語^仁。鹿狩と善^ク。又理^カあ^ル。故^ニ
何^レと^シ。

伽羅の價

名香城價^ハ千^ニ双。伽羅^ハ上^ニ中^ニ下^ニに^依ひ^テ。
二三十^ニ双。一二^百双。月^モ。多^クも^多の^さり。ま^ま。

下品^ノ伽羅^ハ。と免^本の^まり^に了。四五^雙の
す^まの^さめ^と免^申。檀^浦か^し軍^記。
あ^んの^由け^うの^と。小^神に^と免^教伽
羅^ハや^まぐ。としよ^ハ免^知る^レ。と^時の^とあ
ま^の伽羅^ハとしよ^ハ。二三十^雙を^及ぶ^レ。奢^ハ
移^レと^あり^しの^さり。

小兒類の文字

小兒^生後^後。男子^ハ三十^日。女子^ハ三十一^日。
宮^系としよ。産^砂の^神。系^とめ^め。あ

時。小兒男子あらら。紅毛ニ類ニ大とらニ文章
 著く。廿子ハわらハ小とらハ文章ニ著く。
 二ハ上東門傍の第の子に。大の子ハうニ
 たるハ祝ハ一ハ。大のハ黙ハ上ハ打時ハ天子。
 大ハはハ流ハときハ太子ハらハあハことハちハるハ。
 大のハ文章ハ。大のハ字ハのハ違ハひハるハ。少のハ字ハのハ
 大のハ文章ハよりハ誤ハるハるハ。安孫ハ為ハ章ハのハ説ハ。
 為ハ房ハ今ハのハ在ハ存ハ能ハ引ハ。康和五年
 八月廿七日。東宮遷御高松ハ築ハ成ハ由ハ刻

出刻。宗通御御款。廿ハ著ハ大ハ字ハ。先日女
 房奉仕。為ハ房ハ今ハの子ハ息ハ。顯陸ハ今ハのハ日ハ記ハ。
 戊刻行啓ハ依ハ可ハ奉ハ善ハ阿也ハ都ハ古ハ人ハ奉ハ。
 以ハ印ハ為ハ御ハ使ハ被ハ申ハ院ハ。為ハ章ハ按ハすハ。
 大のハ字ハ紙ハ善ハ奉ハ。何ハやハ流ハこハ人ハ紙ハかハくハらハひハ
 及ハくハらハ。於ハ二百ハ西ハ家ハよりハ大ハとハ小ハ字ハ善ハ也。
 籠ハ集ハるハ。いハぬハくハくハのハ守ハりハまハめハらハひハと。
 何ハのハ白ハにハみハぐハやハ子ハのハ類ハにハ善ハけハ流ハ文章ハ紙ハ
 みハもハはハけハるハ。はハれハらハ今ハのハ大ハのハ文章ハ。大と

りの文字あり。又赤子をれり。糞糞紙購ふ為。
おとりふ文字紙書ふやと。つる人の後何れ。
理なきに何ぞ。

元結ひ

今のもとゆひ。むしうのえゆひ何ぞ。むし
用ひ。髪元紙結ふと。ふらふらふと
結ひとあり。又紙を切ぐ今のたけ
のやうにしむすふ紙。平元結ひとあり。
朽水灸御の載恩。紙を引書と。が結

寺の軍抄詔のとあり。終禪寺の平元
結ひ。葉笈髪にゆひと有。又引は手紙
より結あり。青山及政所佐の中。ゆきと
ひの吹。一そくゆき。水ひきとゆあり。又ふ
下一りゆき。水引をゆあり。水ひきあり。
二とあり。ゆき一とあり。ゆきと
ひと。水引の何れ。まこひちくえゆあり。
一。又水引え。ひつはまを。ゆひとあり。
あり。ゆきと。左の方に。あな何ぞ。

に有下。存もろくも有下。一とあがけに流
み。きり多あり。と有れが今のもよゆいり
水引あり。水引の多りきりるをさるす。又
平もよゆい。今の只長のるもあり。

端午

端午ハ午の月のたし見。五日よりよる
おまじりに。資暇録ふ。端午者業周
處風土記。仲夏端午。烹鷓鴣角黍
端始也。謂五月朔五日也。今人多

善^ス午字。其義多取。余家元和中
端午詔書。並無作「午字作處」而
近見^レ醴縣尉廳壁^ニ有^レ故光福王
相^カ題^ス。鄙^ニ泉^ニ記^ス。處云^ク。端午五日。山皇三十
年端午之義。別^テ有^レ見^レ耶。とり又端午
ハ端午^ニ見^レと^シ。

五夜

新道成寺の碑に。初夜の子ははく時ハ
諸り無常とびくあり。ごやの子ははく時ハ

廿五夜と云は流し。ひくあり。とりよ見ハ初
夜ハ神文と心得しあり。五夜ハ五更と思
ひ。まらぐ。五夜ハ五更と何し。孔氏雜
談に。前艸官傳註れとあり。持時夜
行ハ今持更是。己持時如今報時。
是己漢官儀黃門持五夜。甲夜乙
夜丙夜丁夜戊夜亦如今五更。又霖
情集。唐文宗曰。若不如甲夜觀事
乙夜讀書。何以為人君也。俗語ハ

初夜とりよし何れと五夜とりよ言物也。
五夜とりよ甲乙丙丁戊何しあり。今
の二夜とりよが如し。富子刻成五更とよ
新ハ何し。

正五九月

正五九月ハ世俗に祈禱月とあり。あり
處に去す。鼠璞上卷にり。今俗人食
三長月。素栴新氏智諱。天帝親以
大寶鏡照曲大神列。毎月一物察

人善惡^ヲ。正五九月^ニ。照南瞻部列^ヲ。唐人^ノ於^テ此
三月^ニ不行^ニ死刑^ヲ。曰^ク。三長月^ノ節^ノ鎮^ニ。因^テ戒^ム
屠宰^ヲ。不上^ニ官^ニ。是以^テ天帝^ヲ為^シ可^ク歌^ハ也。
妄誕^ニ可^ク笑^ハ。然^レ月令^ニ於^テ善^ニ。孟^ノ言^ハ。每^レ
傷^ニ胎^ヲ印^ヲ。母^ノ聚^ル大^ノ衆^ヲ。不可^ク稱^ハ兵^ヲ。於^テ
仲^ノ夏^ノ言^ハ。君子^ノ齋^ニ戒^ニ心^ヲ。掩^レ身^ヲ毋^レ躁^ス
薄^ニ滋^ニ味^ヲ節^ニ嗜^ニ慾^ヲ。靜^ニ事^ヲ毋^レ刑^ス。
於^テ季^ノ秋^ノ言^ハ。年^ノ衆^ノ百^ノ官^ノ無^ク不^レ勞^ス。
内^ニ以^テ會^ニ天^ノ地^ノ之^ノ藏^ヲ。無^ク有^レ空^ノ出^ス。豈

三之升

時令當^ニ然^ニ耶^ト。議^ニに^テこの^ノ節^ノのごと^ク神
御^ノ歎^ハむ^クを^クす

饅頭

宗^ノ五^ノ大^ノ州^ノ紙^ニに^テか^ノん^ノの^ノ名^ノの^ノ事^ヲ。ち^ニち^ニや^クか^ノん^ノ
厚^クく^レん^ノ。う^レん^ノせ^ん。竹^ノ葉^ノか^ノん。白^ノ菓^ノか^ノん
水^ノ蟾^ノか^ノん。す^レの^ノ金^ノか^ノん。け^んひ^んか^ノん。ゆ^きう^き
や^うか^ノん。屋^うか^ノん。ま^きー^ちひ^ちれ。う^ごん。海^んぢ^ぢう^う
これ^ハか^んと^も又^も黠^心と^も中^ハた^つた^つと^も有^レ陰^ヲ除^キ養^フ考^ス
に^テ世^ノ俗^ヲ以^テ小^ノ食^ヲ為^シ黠^心不^レ知^ハ妬^ヲと^りよ。又^も唐

其殺以肉麵二像人頭而為之流傳作饅字不知當時音義如何通以欺猫同音

平家蟹やとと貝

平家蟹嶋村蟹奇といふは河へ流し給と漢土の海を多に食蟹得背殼若蟹譜に吳沈氏食蟹得背殼若鬼狀者眉目口鼻分布明白常寶歌之といふ又曰海中有小螺

善山日晴 滑し詳云 泉明存志 小而殼微 黃毛大殼 細毛其 行斜

以其味辛謂之辣螺可食至二三月間多化為蟹滑今人有得蟹跪半成而尚留殼中者其證也これハヤどを貝と云。蟹滑の類也。漢人の憶説云の証也。

松中拾玉集

拾玉集五卷に世の未だわやせぬる僧といふ有る。信西入道が子どもといふを河へ流し給と云。因位上人宮川奇

合定為侍從刺し。たくにうとす。まらと
有。あり。信西の子。何れを人たれ
ところあり。このや。文章の錯簡せしやう
不克申。若かや。接合せざるなり。

竹杖會ふを

小兒すしに唐人にけ方の會ふ又すに。
かまぐず竹の子と會ふ。唐人これ見よ。此れ
竹杖。時や。東齋語に。漢人適
吳。一人設筍。向何物。曰竹也。歸者

其筍不熟。曰吳人輒轉欺我如吳
と和漢とまに。この藤杖り。同
こころの執

奇袋の製よりあり。はらにあり。や。様
奇のく。こころを。おま。い。れ。を。や。と。し。ふ
有。ま。り。こ。ころ。を。け。る。有。王。太。保。毎。天。氣
和。暖。必。乘。小。駒。從。三。四。蒼。頭。携。照
袋。財。筆。硯。靛。畧。刀子。殘。絨。并
小。藥。各。之。類。照。袋。以。烏。皮。為。之。

四方有蓋并撐。五代土人多用之。と
晋久譚縁と有

壁の上壁

壁の上めり以加亞と考く。周陽雜俎に
大曆中玄覽禪師住荊州隋
岷寺。張琛弟於壁間畫古松
符載為贊。衛象為賦。名士謂
之三絶。師見曰。何為存吾壁。余
加聖焉と云

謡の詩

白樂天のよむの詩に。白雲帯に似て山
の勝地あると云ふ詩人皆一笑す。此れど
山帯と云ふ有。陸龜翁が庐山誌に。香
炉峰孤峭特起。杰矗若杏烟天將
雨。白雲冠峰俗號山帯と云ふより
と云ふれと云ふべし

竜の雌雄

画家者流。竜の雌雄は片まびくたにせず

乘畧記に。劉洞微善畫。畫一龜。一日有
文婦造門曰。龜有雄雌。其狀不
同。雄者角浪。凹塌。目深。鼻豁。鬚
尖。鱗密。上牡下殺。朱火燦々。雌
者角靡。浪平。目肆。鼻直。鬚圓。
鱗薄。尻牡於腹。洞微從然曰。
何以知之。其人曰。身乃龍也。化為
雙龜。形去。

大欲の事欲の如

よの中に欲ふ事。却て換多き。了る位
見たり。歐陽公の帰田録に。終思
公。性儉約。子弟非時。不能一取。終公
有珊瑚筆格。平生珍惜。子弟有欲
之。子弟佯為求得。以獻公。公欣然。以
十千。與之。歲中。率五七如狀。公終不
悟。と。よの如大欲。無欲よりよ。

取贖

小説家に對膽取取取。奇話の趣向
とす。唯無慙を於て以て主として。儲りあり。
膽取取取。ハ真臘風土記に。前於於
八月内取取。蓋と城王毎年索人
膽一甕。步千餘牧。遇夜則多方。令
人於城中及村落去處。遇有夜行者
以繩兜住其頸。用不刀於在照下。取
去其膽。俟數足。以饋占城王。獨不取
唐人之膽。蓋因一年取唐人一膽。難

干其中。遂致甕中之膽。俱有而不可
用故也。近年已除取膽之事。乃置取
膽官屬。居北門之裏。とり小膽取取事
跡ありしころをいふ

過君

いまの世には君とり少く立君あり。そのうち
居るは。居る。は。と。の。得。あり。
先頃東師を横町を何のぼりといふきん。
去君のり。さりといふ説。何れとを。識人ありの

奇合に立居はけし君の園有て。入中の小を
のうちには居る紙はけし君とす。ぼしは厨子の
うちには居る紙とす。今のきりて居るの類ひあり

相角

霽山集相角の註に。荆楚間山家。季子春
截^ニ相皮^ヲ卷^テ而吹^之謂^フ之^ヲ相角^ト。と有奥州
にふく。コサ笛の製法とす。木目何し木
の皮紙。小捻のやうに巻く。末紙又のさう
おもなる紙。吹るもやう。長二尺をすぞり

きり。同類をぞり。

風箏

まろしりの紙を高低紙とぞりしり。
鳴響び出さず。詢菊縁にしり。作^ル紙を
引線乗^テ風^ニ為^ス戲^ト。後^ニ於^テ也鳥首以^テ竹^ヲ為^ス
笛。使^ニ風^ヲ入^ル作^ル身^ト如^シ箏^ト。名^ヲ呼^フ風箏^トと
有。叶^ハ笛とらふ。薄くしりしり。竹箏の
幸あり。獨醒雜志に。今之風箏古
紙也。この紙に。箏當作^ル箏。蓋以

竹箴^ノ弦^ヲ其上^ニ風吹^テ鳴^ル如^シ琴也^ト。よりあま
とく。

脛腠腠

脛腠^ハ海^ノ朽^{ナリ}。輶^夫松^ノ前^{ヨリ}出^ル
れど。真^ノ物^ハま^ニれ^{ナリ}。お^シく^シ海^ノ朽^ハ上^ニ
以^テ。脛腠^ハ海^ノ朽^ト。海^ノ朽^ハ上^ニ
齒^ニ重^ク。下^ニ齒^一重^ク。海^ノ朽^ハ
上^下と^モ齒^一重^クなり。

米言

小兒^走く^レたり^ノ。艾^子後^語あり。燕^里季^之妻^{。羨}而^以湯^{。私}其^隣女^{。年}季^聞而^思慕^之。一旦^伏而^規焉^{。見}女^年入^室而^門扃^矣。因^起叩^門。妻^驚曰^{。吾}夫^也。奈何^{。女}年^顧問^有痛^乎。妻^曰。無^寔然^則安^出。妻^目壁^間布^囊曰^{。是}豆^矣。女^年乃^入囊^懸之^{。林}側^曰。問^及則^給以^米也。啓^門内^季。通^室

中求之不得。徐至。殊側其囊。黑然而見。舉之甚重。詰其妻曰。是何物。妻懼甚。思嚙嚙久之。不能答。而季厲聲呵問不已。少年恐事露。不覺於囊中。應曰。吾乃米也。季因撲殺之。及妻。父子每而笑曰。昔石言干。晉今米言干。燕一干。とり小磨や。いあ。今も。うきまか。人情に。村儒や。和漢古今。故り。人情以諱す。

一部の著解 寸草一こ

齒 里ん 欠

齒くらん。寸草一こ。き好。事より。小條五代談に。二長に。事。老弱。士。た。もの。歯。お。何人物。に。味方。首。天守。集。は。れ。以。免。首。お。

おどろく。ちれいあせなきやむいしおどろく首の
よき人といふ。黄泉したまは。白歯のふかき。
おどろくはけしむれと。おどろくおどろく。
と有るしむる。又そのころの風俗は、
きよ有。おれが親父の知り。三百石を。居
られしが其時ハ軍。多し何事。何事を不自
由を。おどろく。勿論。用意ハ面と射
を。おれと。おどろく朝夕ハ難。おれと。おど
ろく。おれが足掻おどろく山、祿炮打り

素き。其時に朝茶飯。おれと。居あ
不持き。其時ハ我亦も茶の。おれと。お
たへおどろく。又極も。おれと。お
おれと。行と。おれと。おれと。おれと。お
おれと。おれと。おれと。おれと。おれと。お
七の年。おれと。おれと。おれと。おれと。お
おれと。おれと。おれと。おれと。おれと。お
おれと。おれと。おれと。おれと。おれと。お
おれと。おれと。おれと。おれと。おれと。お

由あるべし。おぢや侍。又屋老一あるべし。中
中先よりいふ。疾に入夜食とある。さう
つと有是とて、今時の

御代の有難き故去るべきあり。

孔子の難

孔子に。子思告齊君。先君生、無棺、
天下王侯不以其損其教。今像多疑、
去れども。道光板屋廟祀典考之叙。
儒者諺。孔孟若過廟中肅然樂而

興。莫不有羹犒之思。然一詰其至聖侍
側之班行。東西廡。昭穆之位次。孰
稱賢。稱儒其生也。何代。其祀也。何
年。往々茫無所對。斯其故何哉。
蓋縁賢出處事實。教見載籍。
那收藏之富。學問之深。上下千古
難。以貫串洞悉。歷觀家語。史記。
暨釋史。尚史。唐書。宋史。及杜氏
通典。吾學編。明會典。闕里志。各

省郡志。縣志。諸書。序次既異。姓氏年齒亦復不同。至於圖則始於漢文翁。在室。南宋太學。石刻。明胡文煥。聖賢蹟圖。諸刻。祇錄孔門弟子於漢唐諸儒。俱未及載。若聖賢像贊。則刻於明季。其書不獨於諸賢名氏爵里。穿鑿附會。而各像俱係懸擬。尤不足取信。至洪氏之廟紀畧一書。則有考無像。况所載止

及康熙甲午以前。其後從祀者俱未及收。我朝列聖宗儒。重道尊賢。相承自世宗憲皇帝。雍正二年。至今。上道光六年。歷有增祀。惜洪氏善後未有繼作者。同里顧君湘舟。因諸書之互異。缺畧。輯為聖廟祀典圖考五卷。附以啟聖祠考。孔孟聖迹圖。廣蒐博采。正其訛謬。訂其異同。一遵雍正二年頒定。位次及列聖。

孔子像



今上所降諭旨增祀先賢位次更
訪漢唐以來諸先賢真像繪入
其無從訪求真像者姑闕焉以
俟補續一缺著一出并如秩如是以
嘉惠後學者匪淺余昔備員儀
曹每留意於先賢故實今見碩
君是美喜其蒐羅之廣博考核之
精詳余與武陵中姻世交故不辭
不敏而為之序道光丙戌季秋下

澣。長洲彭希鄭撰并書。上有聖像
發。あは。國。切。と。く。と。急。し。

いちや

七の子とらふ。教。た。と。が。代。バ。の。ち。や。が。お。ひ。ま。よ。
と。ら。ふ。有。と。れ。也。三。味。縁。の。う。と。み。え。う。と。み。
あり。又。白。の。言。教。あ。ら。所。く。あ。ま。り。と。有。て。疾。く
下。向。在。し。れ。眾。代。バ。の。ち。や。が。原。心。ま。ま。う。と
の。の。ち。や。と。ら。ふ。い。大。上。藤。の。御。名。の。事。と。ら。ふ。
東。山。名。舊。誌。に。ち。やく。あ。ら。ち。や。昔。の。名。あり。

又世俗に花街の石火の小女郎故おちよぼと
りよ。これをもいふ事には。少いとおちよぼと有。ま
のちやとらよ。助字とて阿我とらよ教す也。
資暇縁に。阿宅家子。阿助字。詞也。
急語乃以宅家子。為茶子。既而。
亦云。阿茶子。或制其子。遂曰阿
家。以宅家子。為茶子。これらの教す也。
信巫

醫藥手書之後。祈禱まじり巫祝信す

る事をもつてまじり。体薬の中。醫より又巫并も
つてす。一偏の業は用ひず。綿布故信す。
又加持祈禱の供承候の事。平愈候りの教
えの事。まじり。まじり。まじり。後徒
又則て信巫の事。章故も。於其まじり。まじり。
唐時との獨醒志に。夏英公師。江西。日
時。豫章大夜。公年。醫製。藥分。給
居民。醫請曰。藥難付之。恐亦虛設。
公曰。何故。醫曰。江西之俗。尚鬼信

巫。每日疾病未嘗親藥餌也。公曰如
 此則民死於水旱者多矣。不可以
 不禁止。遂下令捕為巫者杖之。其
 著聞者黜隸他州。一歲部內甚治。
 一千九百餘家。江西自以漢巫遂
 息。天子為生之業故受之。其如飯
 食少。乃其つる。業之備を以て。加持
 祈禱の供也。水多。能に至る。何それ。也。

三九四六

朔望

朔日の禮。中む。その事。中原康
 富。弘治二年七月一日。参伏尺版。
 又参三條。皆朔日之礼。と有ま。り。不
 元。朝廷に拜す。於る。也。獨醒志に。范
 志宜公。謫永州。年七十餘矣。每朔望
 日。必陳列其家所藏曲朝宸翰。及
 宣賜器皿於堂上。率其子孫羅拜
 其下。拜畢。緘如初。然後長幼相

名と利と事の趣き。古びに異りたるあり。
 晁氏客語に。名利皆不可好也。然好
 名者比之好利者差勝。好名則有所
 不為。好利則無所不為也。といふ。謙
 利好むもの。無事。以て之をせむものあり。
 名好むもの。死事。以て之をせむものあり。この二は
 齟齬する所あり。釋氏より名利は遠
 るといふ理あり。世俗に於てはと教ふもの
 意深しきと云ふきにはあるべし。

ついで草

宇治拾遺に。毒草紙合ひしましる有
 又ついで草紙の云々。ついで草は
 淨海裡有。ついで草は。避暑縁話に。四明
 温台間山谷。多産菌。然種類不一。食
 之間有中。毒往々至。殺者。蒼蛇。虺
 毒氣所薰蒸也。有僧教。掘以冷水
 攪之。令濁。少頃。取飲。皆得全活。其
 方自見本草。陶隱居。注謂之地漿。

亦治_ス楓樹菌食之笑不止俗言_フ笑
菌者居山向不可不知_ル此法_也

痘病

婦_ノ子_ノ產_ム死_ス多_クの多_クの醫_ノ為_ニ
命_ハ失_ルの_有。何_レも_モお_シて_もさ_るや
終_ル法_ハ避_ル暑_ニ何_リ。婦_ノ疾_ハ莫_ク大_ニ
於_テ產_ヲ葺_テ倉_ニ卒_ニ為_ル痛_ヲ醫_テ所_ニ殺_ス者_多矣
不_レ素_ニ講_ス故_也嘗_ニ見_ル杜_任作_ル醫_準一_卷
其_一訛_ト郝_真子_婦產_四日_瘳症_載

眼。角_弓反_張任_以為_痘病_與大_豆紫
胡_湯獨_活湯_而愈_政和_向余_毒繞
分_晚猶_在葺_中。忽_作此_症。頭_足反
接_相去_幾二_尺。家_人驚_駭以_數婢_一強_テ
拘_之不_直。適_訛此_方而_藥囊_有獨_活
乃_急為_之召_醫未_至。連_進幾_劑。遂_能
直_醫至_則愈_矣。更_不復_用大_豆紫
胡_湯不_可不_廣告_人。二_方皆_在千_金
第_三卷

堂據岡下臨江南數百里。真潤金陵三州。隱之若可見。公每暑時輒凌晨携客往遊。遣人走邵伯取荷花千餘朵。挿百許盆。與客相間。遇酒行即遣妓取一花傳客。以衣搗其葉盡。度則飲酒。且風流多新。酒令多奇。

黃昏

黃昏之風。乃天之所。嵐以風。乃天之所。黃昏之風。乃天之所。

にちのく。夕ぐれ。夕ぐれ。昏黄を之。と。と。と。華航紀談に。孔天瑞。西資註云。疎影橫斜。水清淺。暗香浮動。月黃昏。不知和靖意。偶到為復愛。其句中有黃昏二字。議詩者謂日斜為黃昏。非也。其二字蓋亦兩字耳。若謂日斜。而不曰昏黃。而曰黃昏。亦有源矣。余嘗宿平月湖。亦家。而有堂植梅竹。月白。數清。余至。每宿于

雷鼓

如之如子。の同。鼓。宋趙考衛。靈鼓。八面鼓也。靈鼓。六面鼓也。路鼓。西而鼓。鼓。而。而。鼓也。

十二生肖

支干考に。種々。説あれども。又。子。屬鼠。無牙。丑。屬牛。無齒。寅。屬虎。無頂。卯。屬兔。無

唇。辰。屬龍。無耳。巳。屬蛇。無足。午。屬馬。無胆。未。屬羊。無膽。申。屬猴。無肝。酉。屬鷄。無陰。戌。屬犬。無胃。亥。屬猪。無筋。と。と。参考。一。一。志。一。

承塵

其。之。ん。天。井。板。の。下。に。承。塵。と。い。ふ。物。有。り。に。免。申。倍。舟。難。説。に。在。前。日。帷。在。上。日。幕。西。合。象。宮。室。日。帳。坐。上。承。塵。日。寧。凡。言。設。大。次。小。次。者。皆。指。也。大。次。在。

檀墮之外。小次去檀遠矣。とよみ承磨を天
井板の事と云ふべし。

貨賄の別

人みれを事と云ふるれども。法苑珠林に
ごちに上凡言。貨賄金玉曰貨布帛曰
賄。貨自然物賄以入切乃成。

臠肉の砂すり

臠肉の砂すり。はみりす。
口をきくに。燕人膾鯉方寸切。其臠以暗所

貴。臠。臠。臠。下。肥。處也。故杜子真詩云。
臠。臠。貴。年。中。也。

家具

下。総。の。金。に。櫛。の。う。家具と云ひ。櫛のう
ろ。に。取。ひ。ま。け。は。取。ひ。の。通。を。家具とある
る。ゆ。え。に。これ。を。う。ろ。の。と。云。ふ。禮。儀。の。し。ら。べ。の
處。に。あ。り。し。と。云。ふ。ま。る。く。金。銀。の。借
る。る。有。奇。と。好。む。人。の。為。に。抄。す。語。怪。し。
深。漬。祠。相。傳。神。通。人。假。貨。前。後

事不一。漫誌其槩一二。祠有大池。凡欲假金者。禱於神。以效決之。神許則以契券投池中。良久有銀浮出。如其數。貸者持去。貿易易利。而加倍如期。貝子本祭。謝而投之。銀沒而原浮。其券如人間式。亦有中係之人。若神不許。則投券入水。頃之券復浮。還牛馬百物。皆可假借。投之復出。故不死也。嘗有不能

償者。舍其兒。以盒子盛之。投入。俄頃盒浮起。視之。兒活於中。無恙。蓋神鑒其誠。因而貸其債也。盒外濕而內中故乾。其他類此。故象。

陶大新著卷之三終

